

『青森県史 資料編 近現代8 日記』

田中 祐介

本書は二〇〇〇年に刊行を開始した『青森県史』の資料編の一卷（近現代8）である。近現代の資料編は「近代成立期の青森県」（1）、「日清・日露戦争期の青森県」（2）、「大國と東北の中の青森県」（3）、「昭和恐慌から北の要塞へ」（4）、「復興と改革の時代」（5）、「高度経済成長期の青森県」（6）、「青森論」（7）が既刊である。これらに続く「日記」を主題とした一卷が本書であり、近現代の資料編としては最終巻となる。従来、全国各県の県史資料に日記が収録されることはあったが、一卷全体を多種多様な日記の翻刻にあてた企画には類例がない。以下、本書の構成を概観しながら、その内容の意義を問うこととしたい。

本書は全一七点の日記（日誌を含む）を時系列に収録する。時代幅は広く、一八七一（明治四）年の廃藩置県後から一九四五（昭和二〇）年の敗戦前後に及ぶ。各章の主題に収録日記の点数を添えて示せば、「総説 日記が語る近現代青森県」、「第一章 近代と戦争 —明治期—」（五点）、「第二章 地域的情景 —大正期—」（三点）、「第三章 移り行く生活 —昭和期（1）—」（四点）、「第四章 敗戦の日をはさんで —昭和期（2）—」（五点）となる。各日記には編者の解題が付され、執筆者の情報、所蔵状況、日記の内容と資料的価値が中心に論じられる。

一卷全体を日記資料で構成したことで、人々の日常生活の視点から青森県の近代史が俯瞰できる意義は大きい。加えて日記資料は通史の傍証

には決してとどまらず、それを補い、掘り下げ、相対化する視点をもたらず。編者の一人である河西英通も総説で「多くの日記を読み解くことで、近現代の青森県が生態的で閉鎖的な社会であったわけではなかったことに気づくだろう」と述べるように、本書に収められた資料群は、近代の青森県の像と歴史を豊かにし、あるいは問い直す可能性を多分に秘めている。

こうした意義をもつ収録日記をいくつか紹介すると、弘前事件に関する新たな事実関係を明らかにする「桜庭隊太次馬日記」（第一章）、旧斗南藩出身者としての苦境を感じさせない「林武蔵日記」（第一章）、樺太漁業の様子から近代青森県の北方志向が窺える「野坂漁業部日誌」（第二章）、煙害問題の補償交渉の過程をその裏面も含めて教える「龍野周一郎日記」（第二章）、八戸市長の立場から地域が抱える諸問題を克明に記した「神田重雄日記」（第三章）、国営事業として行われた三本木原開墾の詳細な記録である「三本木原大規模開墾期成会日誌」（第三章）、戦闘記録ではない平時の兵営生活が分かる「澤田一男日記」（第四章）、敗戦前後の教育行政と現場の実態を伝える「三戸小学校沿革誌」（第四章）等がある。

日記は日々の記録の集積であると同時に、人間の「書く」営みの産物でもある。そのため、書き綴る内容と文体（時には言語も）は意識的・無意識的に選択される。本書にはそのような「行為としての日記」の観点から興味深い資料も含まれる。例えば「佐藤正太郎日記」（第三章）は、輜重兵として日中戦争とアジア・太平洋戦争に出征した佐藤の、中国戦線への出征から復員までを綴った二冊の日記帳からなる。日記の冒頭部、

「就寝中突如充員召集令状下命」(一九三七・七・二八)された佐藤は、「熱誠溢ル、町民各位ノ歡送ニ我等十五名勇躍シテ郷土ヲ発ス」(同・八・四)と、出征の様子をやや月並みな、しかしだからこそ軍人としては模範的な言葉遣いで記す。翌日の入隊以後も、日記は軍隊生活に相応しい漢字カタカナの文語体で綴られてゆく。

しかしその文体は長持ちはず、約二ヶ月を経た同年十一月二日には「妄想の記」と題されたごく私的な所感が、漢字ひらがなの口語体で流れ出す。佐藤は「自分で信じられない程自分が軍人であつた事が不思議」と書き、「只一個の人間として考へる時と、国家的人間として考へる事とはその反対の方向に立つもの」「己人主義は人間の真の理想」「国家主義は大部分は虚偽」と言つた具合に、非軍人的な自己の内面を赤裸々に綴り出す。その後の三日間は持ち直したのか、再び従来の文語体に戻るが、その翌日(同・一一・六)には再び漢字ひらがなの口語体となり、「俺は不真面目な人間の方らしい、故郷に老の身を働いて居る父を思ひ^{ママ}ば、故郷人の俺に対しての期待を思ひば、軍人氣質に真面目にならなくては不可ないのだ」と告白する。以後の日記に漢字カタカナの文語体を用いられることは二度とない。

佐藤の文体の変化は、解題(荒井悦郎)でも「本文は漢字カタカナ、感想・思索は漢字ひらがなと意識的に書き分けているようである(後にこの書き分けがなくなる)」と簡潔に言及されるが、その意味はより重く受けとめることもできよう。前段落の引用が示すように、佐藤は「軍人氣質に真面目にならなくては不可ない」と思いながら、自分自身がそうはできない「不真面目な人間」であることを認め、日記の文体を決定

的に変えるに至つた。つまり佐藤は意識的に軍人の文体を棄てたのである。それが佐藤の言う「人間の真の理想」である「己人主義」の宣明であるとは速断しないにしても、文体の選択は、どんな文体が相応しい人間かという書き手の自己意識と密接に関わっている。佐藤の日記は人間の書記行為とアイデンティティの相関性を考えさせる貴重な事例であると言えよう。

本書が資料編であり、紙面に限りもあるのは承知の上で、欲を言えば収録日記がどのような来歴で調査の対象となり、選定されるに至つたのかの説明が欲しかった。日記は歴史を語るが、書かれた日記帳が散逸せず、後世へと伝わり、人の目にとまり、公開され、書き手が想像もしない読者を得るといふ過程自体もまた、時代を生きた人々がアクターとして関わる歴史の一齣に他ならない。日記が故人の大切な形見であり、あるいは長らく反故同前に打ち棄てられたとしても、書き手の生きた証が後世に息を吹き返すことは一つの劇的な物語でもある。今後の日記資料の蒐集と活用の方途を探る指針としても、可能な範囲で収録経緯を示すことには少なからぬ意義があつたと思われる。本書では日記の現在の所蔵状況に簡潔に触れる解題が多いなかで、「三浦茂雄日記」(第三章)、「唐澤みき日記」(第三章)、「三本木原大規模開墾期成会日誌」(第三章)、「三戸小学校沿革誌」(第四章)の解題は比較的詳しい来歴を教える。

編集方針で気になつたのは収録日記のジェンダーバランスである。全一七点の日記のうち、女性が綴つたのは昭和初期の生活習慣や八戸市の様子が窺える「唐澤みき日記」(第三章)が唯一である。この点に関して解題(中園美穂)は、「戦前までの日記の多くは男性が書いたもの」「市

井の女性を書いた日記は大変珍しい」と述べる。

確かに公には男社会で活動し、家内では家父長として君臨する男性の日記が後世に伝わりやすい傾向は多少なりともあろう。しかしそれは必ずしも、女性が「書いた」日記が少なかったことを意味しない。例えば千葉県八千代市を拠点として二〇年以上にわたり活動する「女性の日記から学ぶ会」（代表島利栄子）は、明治以降の女性の日記を中心に数千点の日記およびその関連資料を収蔵する。中には出版された日記もあり、女性の日記から学ぶ会編『時代を駆ける——吉田得子日記1907-1945』（みずのわ出版、二〇一二）や島利栄子監修・小林 波奈著『いくさと愛と女性教師の戦中戦後日記』（東京新聞出版局、一九九七）は、紛れもない市井の女性が綴った日記である。

これらは決して例外ではない。近代日本において女性用の日記は多種多様に出版され、独特の「日記文化」を醸成した。評者には明治以降に綴られた手書きの日記資料群を目録化した経験がある（田中祐介・土屋宗一・阿曾歩「近代日本の日記帳——故福田秀一氏蒐集の日記資料コレクション」より——『アジア文化研究』二〇一三・三）。この中に見る限りでも、『少女日記』（婦人之友社）、『少女ダイアリー』（寶文館）、『女学生日記』（國民出版社）、『令女日記』（寶文館）、『婦女日記』（博文館）、『主婦日記』（婦人之友社）、『女性日記』（改善社）等の市販の日記帳があり、多くが実際に使用されたものである。学校教育によりリテラシーを獲得した無数の女性が日記を綴ったのが、近代の時代的特徴であった筈である。

もちろんこうした事実が編集方針と制作過程で視界に入らなかったと

は思わない。しかし一般的に言って、歴史記述の長年にわたる男性中心主義は、当然ながら資料の把握と蒐集に際しても男性に主たる関心を注いできた。一見して女性の日記が少なく見えるのは、往々にしてそのような学的関心から女性が漏れた結果に過ぎない。手許で確認できる資料の少なさから、男性が書き、女性は書かなかったという歴史の事実に及ぶ先入観がふとした瞬間に導かれる危険には常に留意すべきであろう。これは本書に限った話ではなく、今後の日記資料の保全と活用の全般に関わる課題である。

先述したように、本書は近代の青森県の像と歴史に再考を促す可能性に満ちている。その可能性は、青森県史編纂の基本方針である「北方世界の中に位置づけ、従来のみちのくに対する認識の変革を図る」という宣言が示すように、「東北」の像と歴史を問い直す契機に繋がるであろう。それは延いては、「東北」を作りだしてきた中央の眼差しを相対化し、「近代日本」を再構築する手掛かりともなる筈である。近現代編と銘打った本書の収録範囲は一九五四（昭和二九）年までであり、戦後日本の日記の本格的な取り扱いは今後の大きな課題として残された。続巻が編まれるのは今日明日でないとしても、本書の成功を踏まえ、将来を見据えた日記資料の保全と活用の方途を模索することは、戦後がますます遠ざかりゆく今日において喫緊の課題であるとも言える。

（A4判、七七二頁、青森県、平成二十九年（二〇一七）三月十五日刊行、本体価格五〇〇円＋税）

（たなか・ゆうすけ 明治学院大学教養教育センター助教）